

< 今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 12章1-10節 >  
霊的特異体験と弱さを覚えさせられる体験。どちらが重要か？ 後者。

1 (1-6a) パウロの霊的特異体験。でも、なぜそんな話をするのか？

ここで語られている霊的特異体験はパウロ自身がした体験です。でも、なぜこんな他人事のような語り方をしているのでしょうか？ 偽教師の中に同じようなことを体験した人がいて、そのことを誇っていたようです。そんな話を聞くと、確かに「すごいな」と思うかもしれません。しかしパウロは、「自分もそういう体験は持っているが、そんなことは誇らないし、語らない」と言っているのです。なぜでしょうか？

2 (6b-7) パウロが自分の霊的特異体験を語らなくなった理由の前半。

この霊的体験はした本人にとっては確かに素晴らしい体験だとパウロも思っていますが、語らなくなった理由は、聞いた人に誤った信仰理解を起こすと思ったから(6b)、そして、自分もそれで思い上がり、満足してしまっただからです(7)。(Iコリント 14:15-19 の指摘も大事)。そして、神様から「わたしの身に一つのとげが与えられた」ことで、その間違いに気づかされたと言っているのです。神様のために働くことにも支障を来すような病いが起こったのではないかと考えられています。

3 (8-10) パウロが語らなくなった後半の理由。そしてこれが大事。

パウロは最初、神様のために働くことが妨げられると思ったこのとげを「取り去って下さい」と三度も祈ったとあります。しかし、それは思い間違っていたのです。「主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました」(9a)、とパウロが言いまとめた言葉には大事なことが凝縮しています。「神様、なぜですか」と言いたくなるようなことが起こった経験の中で、パウロのような人でさえ、神様によって赦され生かされていることをまだ十分には分かっておらず、自分の強さで立っていたことに気づかされたのです。したがって、「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」(9b)と語り、さらにその先の言葉(10)を続けられるのです。自分の強さを誇り弱さを嘆く信仰であるなら、結局、弱いことを責め、弱い人やハンディキャップを負っている人を見下し続け、自分自身についても思い巡らすことになり、不安から抜けきれません。しかし、聖書の信仰は、「わたしは弱いときにこそ(神様が)強い」(10)という特別な恵みを教えてくれる信仰なのです！